探究的な学習の在り方に関する研究推進地域

連携中学校区：海田町立海田西中学校区

連携地域を構成する学校

学校名	学級数	児童生徒数
海田町立海田小学校	14	378
海田町立海田西小学校	8	190
海田町立海田西中学校	9	237

（R3.11.1現在で記入）

１　指導上の課題

本中学校区の授業実態や令和３年度広島県児童生徒学習意識等調査の結果（表１）から次のような課題が見られる。

・県平均よりは上回っているものの，児童生徒が，探究のプロセスを意識した学習活動になっていない。
・協働の場において，目的や情報を共有化させる手立てが不十分であり，自分の考えを積極的に伝えられていない。
・地域資源（人材や文化，素材等）を活用した必然性のある課題設定になっておらず，単元の形骸化が見られる。
・自己の変容を省察するための手立てが不十分である。

【表１　令和３年度広島県児童生徒学習意識等調査肯定的回答率】

総合的な学習の時間では自分で課題を立てて情報を集め整理して調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいる。				
県（中）	海田西中	県（小）	海田小	海田西小
68.2	79.4	69.5	78.4	93.9
授業では，自分の考えを積極的に伝えている。				
県（中）	海田西中	県（小）	海田小	海田西小
56.9	61.8	61.9	75.0	75.8

２　研究の概要

（１）研究テーマ及び研究のねらい

主体的に学びを深める児童・生徒の育成
～探究的な学習の単元開発・実践・改善を通して～

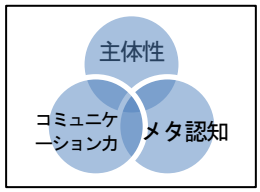
実態を踏まえ，主に次の2点をねらいとした。

① ＰＢＬ（プロジェクト型学習）の考え方をもとにした，探究的な学習の単元開発・実践を行い，主体的に学びを深める児童・生徒を育成する。
② 児童・生徒に，他者と協働的に取り組み，異なる意見を生かして新たな知を創造しようとする態度を養う。

（２）資質・能力の設定について

本中学校区は３つの資質・能力を育成する。主体性，コミュニケーション力，メタ認知である（図1）。

この３つの関係は，互いに影響を与え合うことにより，それぞれの資質・能力がより発揮され，育成されると考えている。



【図１　本中学校区の資質・能力】

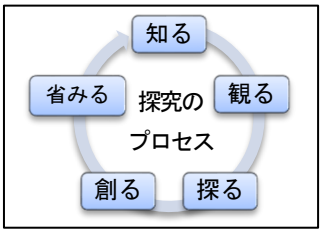
（３）取組について

【探究的な学習の充実に向けての取組】

本中学校区では，探究的な学習のプロセスを次のように設定し（図2），児童生徒の学びの文脈を意識しながら取り組むようにした。

・知る：フィールドワーク，事象と出会い
・観る：単元の見通し
・探る：体験活動，情報収集，思考ツール等を活用した協働学習
・創る：発信，創作，実践等，実社会・実生活との関連
・省みる：振り返り，新たな課題の明確化

上記のプロセスの中で，①課題設定の仕方，②協働の場づくり，③振り返りの方法，の３点において手立てを講じるようにした。



【図２　探究のプロセス】

【小中連携の取組】

海田西中学校区全教職員で，上智大学総合人間科学部教育学科　奈須正裕教授から「ＰＢＬ（プロジェクト型学習）の考え方をもとにした，生活科及び総合的な学習の時間の在り方～実社会や実生活と関わる真正の学びにするために～」を聴講し，理論研修を行った。担当者会では，随時，各校での校内研修の内容について情報交換を行い，自校の取組に反映させるようにした。

【資質・能力の評価】

３校で育成したい資質・能力，「主体性」「コミュニケーション力」「メタ認知」について，３校の研究主任で，系統表（試案）を作成した。

３　実践事例

【探究的な学習の充実に向けての取組】

（１）授業実践事例

①学　年　小学校第３学年
②単元名　発見！たんけん！海田町
～海田町の“いいね”を伝えよう～
③テーマ　地域共生社会。地域の人や文化，自然とかかわり，海田町への関心をもつ。
④単元の展開

【表２　探究のサイクルでの学習内容と児童の思考の流れ】

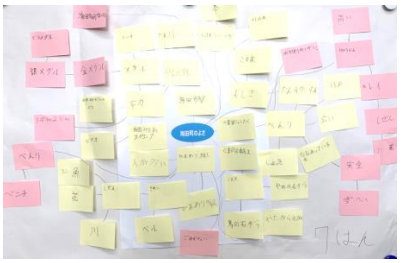
	学習内容	児童の思考の流れ
知る	海田町シルバープラザで製造されている「海田町名所せんべい」と出会う。	「知っている場所だ」「行ったことないぞ」「知りたいな」等，海田町の名所について意識をする。
観る	シルバープラザの局長から，せんべいに込められた思いや，海田町の様々なよさについて話を聞く。	「海田町のよさを探したい」「他校と交流したい」「多くの人に伝えたい」等，自分達の「やりたいこと」を明らかにする。
	実現（解決）していくための見通しをもたせ，指導者と共に学習計画を立てる。	「海田町のよさを知るためにどうしたらいいか」等，やりたいことを実現するための見通しをもつ。
探る	“いいね！”の視点について話し合う。	「“いいね！”の中身は，『美しさ』『便利さ』『人の努力』にしよう」等，目的を共有化する。
	海田市ガイドの会の方の案内で，海田町の名所めぐりをする。	グループごとに，視点に合わせて，海田町の“いいね！”を発見する。
創る	キャッチコピーを決めてポスターを作成する。（クラゲチャートの活用）	「“いいね！”が伝わるキャッチコピーになっているかな」等，情報を共有化しながら作成する。
	海田東小学校３年生とGoogle meetで交流する。	「私達が知らなかった海田町の“いいね！”を知ったよ」「質問してもらって嬉しかったな」等，情報交換の楽しさを味わう。

省みる	単元の始めと終わりのウェビングを比較する。ポートフォリオを活用して振り返る。	「海田町の“いいね！”が見つかって過ごすのが楽しくなった」「他の場所のよさも見つけられそう」等，生活への転用を図る。

（2）変容

単元の始めと終わりに書かせた「海田町のよさ」についてのウェビングを比較してみると（資料1），11月時点では，「優しい人が多い」「笑顔」等，抽象度が高いものが多かったが，１月時点では，「ひまわり大橋-自然-瀬野川-きれい」「織田幹雄さん-金メダル-努力」等，事象の数量だけでなく，具体的な名称が増加し，さらに事象と事象の関連付けが見られた。

また，A児の自己評価表を比較してみると（資料2），「有名な所が大人の“いいね！”だったのでびっくり」という感想から，友達との交流を通して「いろんな人の“いいね！”を知ることができてよかった」という関心の高まり，さらに，学習を振り返って「海田町に住んでいてよかった」という郷土愛へと変容しており，学習が進むに連れて学びの深まりが伺える。

11月	1月
	

【資料１　ウェビング「海田町のよさ」】

11月２日	わたしは，有名な所が大人の“いいね！”だったのでびっくりしました。もっと“いいね！”を見つけたいです。
11月16日	いろいろな人の“いいね！”を知れたのでよかったです。意見が同じ人もいればちがう人もいたので，わたしは，人それぞれ考えることはちがうんだなと思いました。
１月28日	海田町には数10こしかいいところがないと思っていたけど，百こぐらいあったのでよかったです。海田町に住んでてよかったです。

【資料２　A児の自己評価表】

（3）効果的と感じられた手立て

上記の変容に到る，効果的だった手立てを次のように考える。

①課題設定の仕方
- 実生活・実社会とのつながりを意識させる場
- 児童の「試したい」「挑戦したい」を表現する場
- 自分達で決定した課題解決の見通し→単元計画の掲示

②協同の場づくり
- 見学の視点の明確化（目的の共有化）
- 思考ツールでお互いの思考を見える化（情報の共有化）

③振り返りの方法
- 単元の導入と終末における「単元を貫く問い」の投げかけ→比較（学びの広がりや深まりの実感）
- ルーブリックを活用した自己評価（言語化）

【資質・能力の評価】

本中学校区で育成したい資質・能力，「主体性」「コミュニケーション力」「メタ認知」について系統表を作成した(表３)。これは，小中学校の「４：中学生」「３：小学校高学年」「２：小学校中学年」「１：小学校低学年」の発達段階に合わせて試案した。この系統表を基に，各学年の実態や単元内容に合わせたルーブリックを設定した。ルーブリックについては，児童・生徒と共有化し，形成的評価に活かすようにした。

また，研究授業等においても，参加者全員でルーブリックをもとに児童の個別評価を行うとともに，ルーブリックの適否について協議した。

年度内に，各校の校内研修において，「めざす学習者像」を共有するとともに，系統表の練り直しを行うようにした。

【表３　主体性における系統表】

4	3	2	1
学ぶことに興味や関心を持ち，自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら，見通しを持って粘り強く取り組み，次につなげることができる。	学ぶことに興味や関心を持ち，自分自身と関連付けながら，見通しを持って粘り強く取り組むことができる。	学ぶことに興味や関心を持ち，自分自身と関連付けて考えることができる。	学ぶことに興味や関心を持つことができる。

４　研究の成果と課題等

（1）成果
- 単元を一括りとして捉え，探究的な学習のプロセスを意識して学ぶ児童生徒が増加した（表４①）。児童生徒の思考の流れに沿った単元づくりが，効果的だったと考える。
- 小中学校ともに，主体的に課題設定をする児童生徒の割合が高まった（表４②）。教員アンケートにおける同質項目でも肯定的回答率が３校とも100%だった。

（2）課題
- 小中学校ともに，自分の考えを積極的に伝えることへの肯定的回答率が低い（表４③）。一方，教員アンケートの同質項目では，95.8%が指導の工夫をしたと回答している。協働の場において，目的や情報を児童同士が共有化できる手立てを要する。
- 教員アンケートでは，「児童（生徒）が，振り返りをするときには，『どこまで分かったか』，『学習の方法でうまくいったことや失敗したことなどの理由』を考えるような指導を工夫した。」の肯定的回答率が66.7%と低く，メタ認知力を育成するための手立てが不十分である。

【表４　令和３年度広島県児童生徒学習意識等調査と追跡調査における肯定的回答率の比較】

①総合的な学習の時間では自分で課題を立てて情報を集め整理して調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいる。			
	海田西中	海田小	海田西小
６月	79.4	78.4	93.9
２月	88.1	89.1	93.3
②授業では，解決しようとする課題について，「たぶんこうではないか」，「こうすればできるのではないか」と予想している。			
	海田西中	海田小	海田西小
６月	77.9	85.0	84.8
２月	92.5	93.8	96.6
③授業では，自分の考えを積極的に伝えている。			
	海田西中	海田小	海田西小
６月	61.8	75.0	75.8
２月	58.2	51.7	76.7

（3）今後の改善方策等
- 児童生徒が意見交流をする際に，思考ツールやICT等の一層の活用を図り，情報の共有化をさせる。また，国語科との関連を図り，対話の仕方について具体的に指導をしていく。
- 児童生徒のメタ認知力を育成するために効果的だと思われる振り返りの方法について，研修を深める。
- 教員が協働して，海田町の素材を活かした単元開発を行う。